

生徒が言葉に意識を持つ言語文化の授業づくり

— マインドマップを用いた言語活動を通して —

井澤 夏子¹

平成30年に公示された『高等学校学習指導要領解説国語編』では、高等学校国語科の課題として、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っていること等が挙げられている。また、国語科の目標として、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語的確に理解し効果的に表現する資質・能力を育成すること」が示された。本研究は、その第一歩として生徒が言葉に意識を持つことに着目し、マインドマップを用いて短歌を詠む言語活動を実践し、その有効性を検証した。

はじめに

令和4年度より、「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」(以下、「新学習指導要領」という)が年次進行で施行された。

改訂の背景として、中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」において、高等学校国語科は主体的な言語活動が軽視され、講義調の伝達型授業に偏っている傾向があること(中央教育審議会 2016)等が指摘された。

所属校における国語の授業では、生徒は直向きに学習に取り組むものの、自身の思いを言葉で整理したり、相手に伝えたりすることに課題が見られる。これらは、自身の持ち合わせている言葉を把握していなかったり、他者の思いを意識せず、思い付くままに言葉を用いたりすることが原因として考えられる。

これらのことから、所属校の生徒が自身の思いを適切に表現する言葉を用いて、他者に伝えられるようになるためには、言葉一語一語に意識を持ちながら、自身の思いを表現できるだけの言葉を獲得することが必要だと考える。そのための第一歩として、生徒が言葉に意識を持つことに着目し、本研究の目的を次のように設定した。

研究の目的

生徒に自身の思いを他者に伝えようという姿勢を身に付けさせるために、言葉に意識を持たせるための言語活動を実践し、その有効性を検証する。

研究の内容

1 研究の背景

1 神奈川県立相原高等学校

(1) 所属校の現状について

所属校は農業科と商業科が併設された専門高校である。グランドデザインにおいて「将来の地域産業を担う人材の育成」、「人間性豊かな職業人の育成」等を掲げており、地域に根差した様々な産業との連携を重視した教育を目指している。具体的には、地域住民に向け、授業で生産した畜産物や農作物、加工食品等を定期的に販売したり、地域の行事に参加したりする等、多様な他者と関わる機会を多く設けている。また3年次では「課題研究」という科目が設けられ、自ら設定した課題に取り組み、取り組んだ成果を資料にまとめたり発表したりする機会がある。そのため、所属校では生徒に自身の思いを他者に伝えようという姿勢を身に付けさせる重要性を感じながら、日々の教育活動を行っている。しかし、無意識に言葉を用いてしまい、他者に自身の思いが的確に伝わらないと戸惑っている生徒が少なくない。

(2) 高等学校学習指導要領(平成30年告示)について

『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説国語編』(以下、『解説』という)より、国語科は「言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。」(文部科学省 2019 p.23)と示された。このため「言葉による見方・考え方を働かせることが、生徒に「国語的確に理解し効果的に表現する資質・能力」をより良く身に付けさせることにつながる(文部科学省 2019 p.23)とし「言葉による見方・考え方を働かせる」ことについて、「生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着眼して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。」(文部科学省 2019 p.23)と説明している。

大滝は「『言葉による見方・考え方を働かせる授業』とは「『言葉』に徹底的にこだわる授業」であると指摘している(大滝 2019 p.15)。その実現のため、教員は言葉の学習になるよう教材で教えることを意識すること、生徒に言葉に着目させ、練り上げた考えを

自分の言葉で表現させるような言語活動を効果的に取り入れることを示している(大滝 2019 pp. 13-15)。

(3) 新科目「言語文化」について

本研究では新科目「言語文化」で検証を実施することとした。「言語文化」については、『解説』において次のとおり示されている(下線は筆者)。

「上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深めることに主眼を置き、全ての生徒に履修させる共通必修科目として新設した。小学校及び中学校国語科と密接に関連し、その内容を発展させ、総合的な言語能力を育成する科目として、選択科目や他の教科・科目等の学習の基盤、とりわけ我が国の言語文化の担い手としての自覚を涵養し、社会人として生涯にわたって生活するために必要な国語の資質・能力の基礎を確実に身に付けることをねらいとしている。」
(文部科学省 2019 p. 109)

これらのことから、本研究では、短歌を教材とすることとした。

2 研究の構想と仮説

(1) 「生徒が言葉に意識を持つ」とは

人々が生活を送るにあたり言葉は身近に存在するため、無意識のうちに用いられる現状がある。所属校の生徒が自身の思いを適切に表現する言葉を用いて他者に伝えられるようになるため、まず言葉に意識を持つことが求められると考える。そこで、本研究では生徒が言葉に意識を持つ姿を次の2点に定めた。

- ①言葉に対する興味を抱いている。
- ②思いを適切に表現するため、自身の持ち合わせている言葉をいかそうとしている。

(2) 教材について

本研究では検証授業で設定する科目を「言語文化」としたため、教材として上代から近現代にかけて詠まれている短歌を取り扱うこととする。

頼岡は、短歌・俳句とは「限られた字数の中で、ある心情や情景を描き出すために、修辞法や表現技法に工夫を凝らし、一語一語を吟味し尽して表現されている点で、『ことばの持つ力』を実感させるのには最適な教材」と指摘している(頼岡 2013 p. 89)。

これを踏まえ、短歌は生徒が言葉に意識を持つことができる教材として適切であると考えた。

(3) 言葉に意識を持つためのマインドマップ

生徒が言葉に意識を持つための手立てとして、思考ツールであるマインドマップに注目した。

頼岡は、生徒が短歌・俳句を詠む際、マインドマップを使い印象に残っている場面や心情を書き出させ、「言葉を引き出す手段」として使用している(頼岡 2013 p. 99)。萩中は、中学校において表現学習における語彙指導として、「書くことの学習における語句選択の場面に、語彙の体系を作る活動」としての「マッ

プ」作りを実践した(萩中 2021)。森山は、「語彙力を高めるには、『語との出会い』を大切にしていく必要がある。出会わない語を身に付けていくことはできない。具体的には、簡単でもいいので、『言葉のノート』のようなものを作り、出会った言葉を集めていくこと」を提案している(森山 2021)。

以上のことから、生徒が言葉に意識を持つためにはマインドマップを用いて、現在、自分が書き表せる言葉を可視化し、関連する言葉をつなげることが効果的であると考えられる。本研究では、次の視点でマインドマップを用いることとした。

- ①自身の持ち合わせている言葉を可視化する。
- ②自身の持ち合わせている言葉と関連する言葉をつなげていく。
- ③自身の思いを表す言葉を探す。

(4) 研究の仮説

以上を踏まえて、次のように仮説を立てた。

マインドマップを用いた短歌を詠む言語活動は、生徒が言葉に意識を持つことに効果的である。

3 検証授業

(1) 検証授業の概要

【期間】令和4年9月16日(金)～10月24日(月)

【対象】相原高等学校 第1学年6クラス(239名)

【科目】言語文化

【単元名】自分の気持ちを短歌で表現しよう

【授業者】筆者及び当該科目担当者1名

(2) 各時間の授業内容

ア 第1時

まず単元を通し、言葉に意識を持つことができるようマインドマップを用いていくことを伝えた。次にマインドマップの使い方として、ある言葉から連想される「もの・ことを表す言葉」、「イメージを表す言葉」、「感情を表す言葉」を思い付く限り書き出したり、関連のある言葉をつなげたりするよう説明した。

説明後、「四季」それぞれの季節から連想される言葉を書き出し、自身の持ち合わせている言葉を把握する活動をした。その後3、4人のグループで、それぞれマインドマップを共有し合い、他者の言葉を自身のマインドマップに書き加える活動を行った。

イ 第2時・3時

第2時で春、夏の短歌、第3時で秋、冬の短歌をそれぞれ鑑賞し、鑑賞後は自身の「四季」に関する言葉を広げる活動を行った。鑑賞させた短歌は、情景が浮かびやすい短歌を選んだ(表1)。また、春は『新古今和歌集』、秋は『古今和歌集』に入集されている短歌のため、詠まれた時代背景を説明しながら鑑賞させた。ただし、生徒が短歌の言葉を基に自分なりに鑑賞することができるよう、現代語訳はワークシートには示さず、大村の古典作品における注の付け方(大村 1983)

を参考に語句レベルの注のみとした。また①～⑥の項目を設けたワークシートに従い、短歌の言葉に着目できるよう鑑賞させた(図1)。

鑑賞後、第1時でマインドマップに可視化させた自身の持ち合わせている語に短歌の言葉や鑑賞を通し思い付いた言葉をつなげさせた(図2)。

表1 使用した短歌

春	「風かよふねざめの袖の花の香にかほる枕の春の夜の夢」(皇太后宮大夫俊成女)(田中、赤瀬 1992)
夏	「青空にソフトクリームぶちまけてなんて平和な夏なんだろう」(木下龍也)(木下 2013)
秋	みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける(よみ人しらず) ※「いろいろ」は横書きに合わせ筆者が記した。 (小島、新井 1989)
冬	「『寒いね』と話しかければ『寒いね』と答える人のいるあたたかさ」(俵万智)(俵 1993)

⑤ 五感を使ってイメージした情景	③ 描かれている時間帯が想像できる言葉や表現を抜き出そう	① 季節感を表す言葉や表現を抜き出そう	④ 上記の言葉から和歌で描かれている時間帯は? [理由]	② 上記の言葉から受けるイメージ、あるいは感情・感覚	⑥ 語り手の気持ちとは? どの言葉や表現から、考えた?

- ① 季節感を表す言葉や表現
- ② ①の言葉や表現から受けるイメージ、感情や感覚
- ③ 描かれている時間帯が想像できる言葉や表現
- ④ ③の言葉から推測した短歌で描かれている時間帯
- ⑤ 五感を使ってイメージした情景
- ⑥ 語り手の気持ち

図1 鑑賞で用いたワークシート(春)

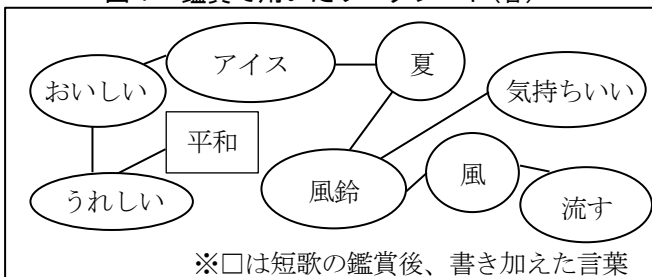


図2 生徒Aのマインドマップの一部

ウ 第4時・5時

まず短歌の詠み方を東、俵の著書を参考にしながら説明した。次にマインドマップに示した自身の持ち合わせている言葉を参考に、短歌を詠む活動を行った。本単元で取り上げた[思考力、判断力、表現力]の「書くこと」の指導事項イについて『解説』では次のように示されている(下線は筆者)。

「効果的に伝わるようとは、読み手を想定し、誰に何のためにどのようなことを伝えようとするのかといった観点に基づいて、我が国の言語文化に根差したより適切な表現を工夫することを指している。」(文部科学省 2019 p.124)

これを踏まえ、マインドマップに書き出した自身の持ち合わせている感情を表す言葉を参考にしながら、短歌に込めたい思いを行動や情景の描写によって表現するよう指示した。

エ 第6時

クラスメイトの短歌を鑑賞し、鑑賞後、自身の短歌を振り返る活動を行った。鑑賞は詠み手が短歌に込めた思いや、思いを伝えるためにこだわった言葉や工夫した表現は伏せた状態で行った。振り返りでは、他者からの鑑賞を基に、自身の伝えかかった思いが読み手に届いたと感じる点、更に言葉や表現の工夫をしたいと思った点について記述させた。

4 仮説検証の手立て及び検証結果・考察

(1) 仮説検証の手立て

事前、事後アンケートにおける数値の変容、毎時間の振り返りと事後アンケートにおける記述内容を分析、検証した。

【アンケート実施期間】

目的: 生徒の言葉に対する意識を問う。

事前: 令和4年9月12日(月)～9月15日(木)

事後: 令和4年10月11日(火)～10月24日(月)

(2) 検証結果と考察

ここでは、2(1)で示した、生徒が言葉に意識を持っている2点の姿が、検証授業において見られたかどうかを確認し、仮説を検証していく。

ア 言葉に対する興味を抱いているか

自分は文章や文学作品における言葉の使われ方や表現の工夫に興味がある。n=225

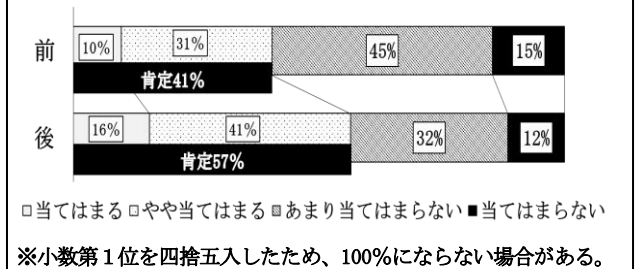


図3 文章や文学作品における言葉への興味

「自分は文章や文学作品における言葉の使われ方や表現の工夫に興味がある。」という質問に対し、肯定的な回答をした生徒は、41%から57%に上がった(図3)。

否定的な回答から肯定的な回答に変容した生徒Bは、事後アンケートにおける記述内容を見ても、最初は短歌への興味がなかったが、授業を通して言葉の特徴について考えることを楽しもうとする様子がうかがえた。

これらの結果から、言葉の使われ方や表現の工夫に興味を示した生徒が増え、今回の言語活動が言葉に対する興味を抱くことに効果的であったと考えられる。

【生徒Bの記述内容】 ※下線は筆者。
 ・「たったの三十一文字の中でも、人によって色々な角度から異なった解釈がなされていて、自分の表と他の人の表を比べているととてもおもしろかった。日本独特の『言い切らない』という表現の一端に触れることができ、短歌を作るときもそこを意識して様々な視点から楽しめるものが見つけたらいいなど感じた。短歌作りが少し楽しみになった。」(第2時・3時)
 ・「正直短歌の鑑賞や作成なんかおもしろくないと思っていたが、一つの言葉から全く関係のない言葉に広がっていくのがとても楽しく、もっとたくさんの短歌に触れたいと興味を持った。」(事後アンケート)
 ※生徒の記述において、より読み易くなるよう部分的に平仮名を漢字にしたり、言葉や表現を直したり補ったりする等、筆者が加筆した(以下、同じ)。

イ 思いを表現するため、自身の持ち合わせている言葉をいかそうとしているか

「自分は国語で知り得た言葉や、表現の仕方を日々の生活にいかしたいと思っている。」という質問に、肯定的な回答をした生徒は69%から78%に上がった(図4)。

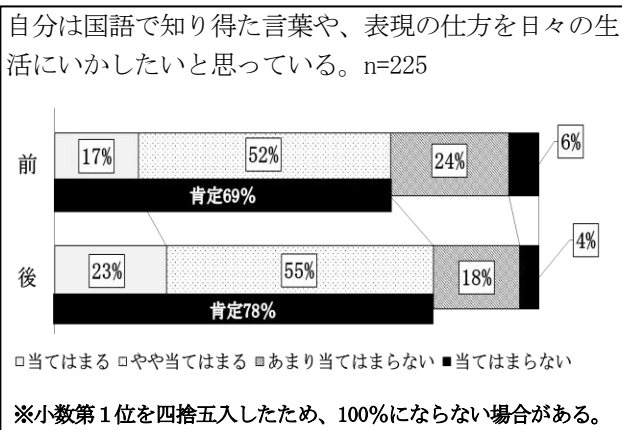


図4 国語で知り得た言葉や表現をいかしたいか

生徒Cは、第2時・3時の振り返りで「自分にはない表現やあまり言わない言葉をマインドマップに書き足すことができました。」と述べていた。また第4時・5時の振り返りで、自分らしい短歌を詠むためにマインドマップを用いたと述べていた。事後アンケートでは、今後、表現を工夫して他者に思いを伝えれば相手からの印象が良くなることを述べていた。また言葉や表現の仕方を増やしていけば、よりの確に他者に思いが伝わると考えている姿がうかがえた。これらのことから、他者に自身の思いを適切に表現できるよう、今後は言葉を増やしていき、自身の持ち合わせている言葉をいかしていこうという姿勢が生じたと考えられる。

【生徒Cの記述内容】
 「どの立場の人かを考えて文を作ったり、言い方を変えたりすることで、相手への印象が良くなることや、自分の言葉の表現の種類を増やしたりすることで、自分も得するし、相手も得できるなど思いました。まだ知らないこともたくさんあると思うので、たくさん知っていきたいです。」(事後アンケート)

次に「知らない言葉を身に付ける際は、辞書による意味の理解だけではなく、どのような場面で使うことができるのか、具体的な場面も考えることが重要だと思う。」という質問に肯定的な回答をした生徒は88%から92%に上がった(図5)。

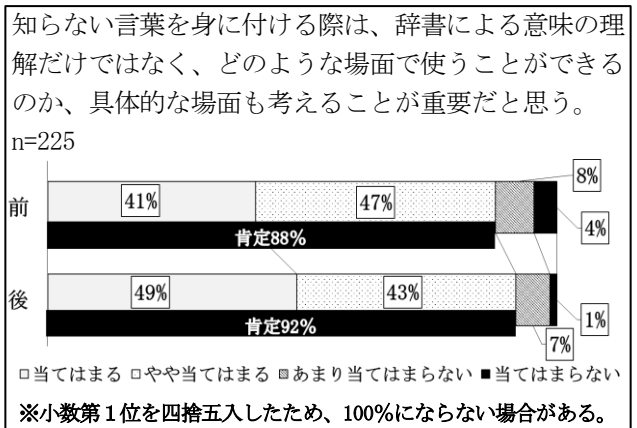


図5 知らない言葉を身に付ける際に重要なこと

図2でマインドマップの一部を示した生徒Aは否定的な回答から肯定的な回答に変容した。第1時から3時にかけて、言葉を通して自身の感性に気付いたり、短歌を鑑賞することで言葉に込められた様々な思いをくみ取ったりしている姿がうかがえた。そして第4時、6時では、実際に短歌を詠む際、マインドマップに可視化された言葉を通して、自身の伝えたい夏への思いを表現する言葉を検討している姿がうかがえた。

【生徒Aの授業の振り返りの記述内容】 ※下線は筆者。
 ・「季語から色々な感情や思いが生まれてくると分かった。普段の自分の気持ちに気付くことができた。他の人の意見を見て一人ひとり考えや感情が違うんだなあと思いました。」(第1時)
 ・「元々、短歌を読んで何を伝えたいのかよく分からなかったけど、丁寧に考えて手順を踏んでいくことで、少しだけ何を伝えようとしているのか分かった気がしました。短歌を詠むのが楽しくなった。言葉の広がりについて気付くことができた。」(第2時・3時)
 ・「自分の考えている情景とよく合う言葉を探してマインドマップからいくつか使いたい。」(第4時)
 ・「夏をどのように表現するか悩んでいた時、マインドマップが役に立った。感情を考えたり、物に表現するのが苦手だったから役立った。最初にちゃんと書いておいて良かった。」(第6時)

実際、第6時のワークシートでは、短歌を詠む際は

夏が終わることへの悲しみを込めていたが、クラスメイトからの鑑賞を受け、季節が移り変わる悲しみを込めるとともに来年の夏に対する期待を募らせた思いも表現したいと振り返り、より夏への思いが伝わる言葉を検討していた。このことから、マインドマップを通し、自身の持ち合わせている言葉、クラスメイトや短歌の言葉に出会うにつれ、自身の思いを見つめ直し、より適切に表現しようと努めていたことが分かる。

さらに「自分が使える言葉を増やしたいと思う。」という質問に肯定的な回答をした生徒は90%から95%に上がった(図6)。否定的から肯定的な回答に変容した生徒の記述内容から、自身の思いを言葉で表現したい、表現するために言葉を増やしたいという記述が見られた。ここから、マインドマップで可視化されたことによって、自身の持ち合わせている言葉を把握することができ、言葉を増やしたい、表現にいかしたいと感じることにつながったと考える。

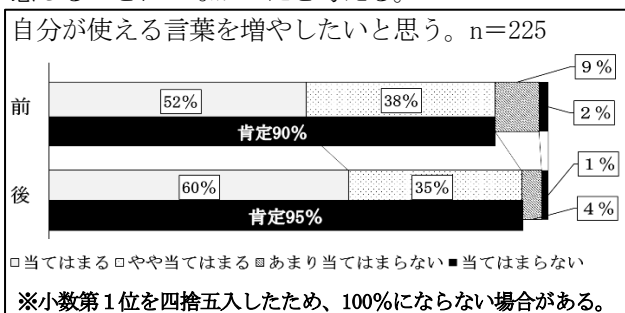


図6 使える言葉を増やしたいと思うか

以上のことから、マインドマップを用いて短歌を詠む言語活動を通して、言葉に対する興味を抱いた姿や言葉を表現にいかそうとした姿が一定程度見られたと考える。

研究のまとめ

1 研究の成果

以上の検証結果により、マインドマップを用いた短歌を詠む言語活動は、生徒が言葉に意識を持つことに効果的であると考えられる。

今回の検証授業において、他者の鑑賞を基に自身の活動について振り返る時間を設けた。そのため、他者に自身の思いを伝えられるようになるためには、自身の持ち合わせている言葉をどのように用いて表現すればよいのかについて振り返ることができたと考えられる。このことから、生徒が言葉に意識を持つことは、自身の思いを他者に伝えようという姿勢を身に付けさせることにつながると考える。よって、本研究の目的を一定程度達成できたと考えられる。

前述のとおり、自身の思いを他者に伝えるためには、思いを表現できるだけの言葉を獲得することが必要だと考える。そのために、まずは言葉に意識を持つことが重要であると考え、本研究では、自身の思いを伝え

る第一歩として、生徒が言葉に意識を持つことを目指してきた。事後アンケートにおいて、次のような感想を述べた生徒がいた。今回の授業を通して、何気なく用いている言葉に意識を持つことが、いかに重要であるか生徒に示すことは確実にできたと考える。

- ・「今まで気にしていなかった言葉について、考えようと思えた。知らなかった言葉が分かるようになる、様々な場面で使うことができるので便利だと思った。また、一つの言葉にも色々な表現の仕方があるんだなと思った。今、現在、自分にぴったりの言葉を取捨選択することができるようになるんだなと思う。」(生徒D)
- ・「コミュニケーションが上手くできなくても上手くなるまで続ける価値が言葉にはあると感じた。」(生徒E)
- ・「気持ちを言葉で表して、『伝える→伝わる』が出来ることは、嬉しかったし、とても面白く感じました。また、意図を明確に伝えるために、どのような言葉を使えば良いのかを、考えて工夫することにはやりがいを感じました。ですが、明確に伝えるだけでなく、言葉に含みを持たせて聞く側の解釈の自由を制限しないことも、言葉を楽しむ一つの方法なのだと、授業で気付きました。」(生徒F)

2 今後の課題・展望について

(1) 自身の思いを適切に表現するために

今回の授業で、自身の思いを表現することに難しさを覚えている生徒が一定数いた。

「自分は自身の感情を的確に言葉として表現することができる。」という質問に対し、肯定的な回答をした生徒は50%に上らなかった。また、「当てはまる」と回答をした生徒が減り、「当てはまらない」と回答した生徒が増えた(図7)。

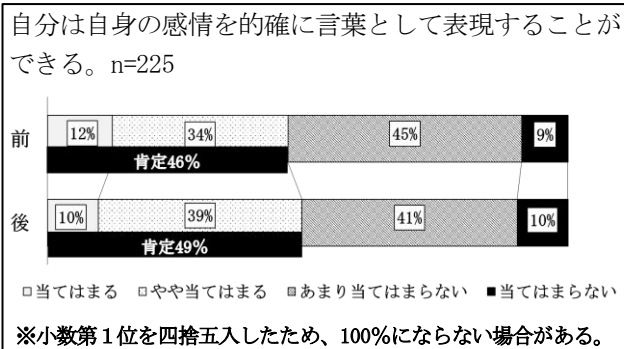


図7 自身の思いを的確に言葉として表現できるか

- ・「自分の思ったことを口で音で表現するのは簡単でも言葉や文にして表すのはとても難しいことだと分かりました。」(生徒G)
- ・「季節の情景を31文字で表すのは難しかった。」(生徒H)
- ・「自分は語彙が少なすぎるから相手に伝わりづらいのかなと思いました。マインドマップで全然、言葉

が出てこなくて、感情も言葉にするのが難しいと思いました。」(生徒I)

上記3名は、第6時の振り返りにおいて「マインドマップをつくる機会があったら些細なことでも書きだしたい。」(生徒G)、「マインドマップを広げて言葉の数を増やせばもっと表現しやすかったはず。」(生徒H)、「もう少し感情が伝わる言葉をたくさん書いて、マインドマップを使いやすくしたい。」(生徒I)と述べていた。これらから自身の思いをより良く表現することに難しさを覚えた生徒はその一方で、その難しさを克服するため、授業を通してマインドマップを用いて言葉をつなげていく必要性を見いだしたと捉えることもできる。

今後の課題としては、自身の思いを適切に表現するために、各単元を通して自身の語彙を量、質ともに豊かにしていく必要があると考える。例えば自身が用いない言葉、知らない言葉の意味を調べた後、マインドマップを用いて自身の持ち合わせている言葉につなげていく活動が考えられる。また、知らない言葉をマインドマップの中心に設定し、その言葉の意味や意味を知ったことで抱いた言葉のイメージ、関連する自身の持ち合わせている言葉を書き出していく活動も考えられる。以上のような活動を継続的に行うことで、生徒の語彙は豊かになっていくと考える。

(2) 自身の思いを他者により良く伝えるために

本研究では、生徒に言葉を意識させることで、他者に自身の思いを伝えようという姿勢を身に付けさせることを目的とした。今後は、生徒に自身の思いを他者により良く伝えることができた実感させるために、自身の思いを他者と共有し合う活動を継続的に行う必要があると考える。例えば、自身の思いを適切に表現する言葉を吟味した上で他者に思いを伝え、他者からの評価を基に、伝えた内容を振り返る活動が考えられる。振り返る際は、自身が吟味した上で用いた言葉が思いを適切に表現する言葉としての確であったかどうかについて着目させる必要がある。また振り返った後、言葉にこだわって改めて自身の思いを他者に伝える活動を行うことが重要であると考えられる。

今後も自身の思いを他者により良く伝えられるよう、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を育成するため、より計画的な授業づくりを考案、実践していきたい。

おわりに

本研究は、生徒に自身の思いを他者に伝えようという姿勢を身に付けさせるために、生徒が言葉に意識を持つための言語活動の一例を示した。今後も、生徒が自身の思いを他者に伝えられるよう、生徒が言葉を意識し、言葉にこだわり続けることができるような授業

改善を行う所存である。

最後に、研究に御協力いただいた相原高等学校の皆様から感謝を申し上げる。

【指導担当者】

西山 貴義² 天野 聡美³ 清野 史康⁴

引用文献

- 文部科学省 2019 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説国語編』 東洋館
大滝一登 2019 「『言葉による見方・考え方』の捉え方 『言葉』に意識的に向き合わせる指導の必要性」(明治図書 『教育科学国語教育』 837号)
木下龍也 2013 『新鋭短歌シリーズ1 つむじ風、ここにあります』 書肆侃侃房 p.78
田中裕 赤瀬信吾 1992 『新日本古典文学大系11 新古今和歌集』 岩波書店 p.50
俵万智 1993 『短歌をよむ』 岩波書店 p.91
萩中奈穂美 2021 「『語彙学習力』育成のための実践的研究——表現学習における語彙指導の意義と方法——」(全国大学国語教育学会 『国語科教育』 89巻) pp.12-13
森山卓郎 2021 「いま、国語教室で育みたい『語彙力』とは 活用的な語彙力の育成」(明治図書 『教育科学国語教育』 855号) p.7
頼岡由美 2013 「短歌・俳句に学ぶことばの力——主体的に活動する場をどう作るか——」(広島大学国語教育会 『国語教育研究』 54号)

参考文献

- 中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」 p.124
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2022年12月14日取得)
大村はま 1983 『大村はま国語教室 第三巻』 筑摩書房 pp.6-11
小島憲之 新井栄蔵 1989 『新日本古典文学大系5 古今和歌集』 岩波書店 p.85
俵万智 1993 『短歌をよむ』 岩波書店
東直子 2019 『短歌の詰め合わせ(ことばアソート)』 アリス館
東直子 2022 『短歌の時間』 春陽堂書店

単元指導計画

教科名：国語

1 科目名「言語文化」

2 単元名：自分の気持ちを短歌で表現しよう

3 単元の目標（ねらい）（身に付けさせたい力）

- 和歌や短歌を言葉の意味や語感から鑑賞することで、自身の語感を磨き語彙を豊かにすることができる。〔知識及び技能〕（1）ウ
- 自分の気持ちが効果的に伝わるよう、構成、展開、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫することができる。〔思考力、判断力、表現力等〕A（1）イ
- 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

4 本単元における言語活動

和歌や短歌を含む他者の語彙に影響されながら自身の語彙を豊かにし、自分の気持ちが効果的に伝わるよう、言葉にこだわり、表現の仕方を工夫して短歌を詠む活動。（関連：〔思考力、判断力、表現力等〕A（2）ア）

5 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
和歌や短歌を言葉の意味や語感から鑑賞することで、自身の語感を磨き語彙を豊かにしている。	「書くこと」において、自分の気持ちが効果的に伝わるよう、どのような言葉で表現するか吟味したり、表現の仕方を工夫したりしている。	短歌を詠むことを通して、言葉がもつ価値への認識を深め、言葉を通して自分の気持ちが効果的に相手に伝わるよう、粘り強く表現の仕方を工夫しようとしている。

6 単元の指導と評価の計画

次	時	学習活動	評価のポイント・指導上のポイント
1	1	<ul style="list-style-type: none">○単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。○全体でマインドマップの作成の仕方をつかむ。○「四季」から連想される「もの・ことを表す言葉」、「感情・感覚を表す言葉」、「イメージを表す言葉」をマインドマップに個人でまとめる。○個人でまとめたマインド	<ul style="list-style-type: none">・単元の目標や、単元の進め方を説明することで、言葉にこだわりながら各授業に取り組み、自分の気持ちを効果的に伝える短歌を詠む意識をもたせる。・マインドマップによる言葉の連想の仕方を全体で理解させる。また、マインドマップを自身の語彙を可視化するために使うことを理解させる。・ワークシート【手引き編】も参考にさせながらマインドマップを使用し、自身の語彙を認識させる。・他者が記した言葉を自身のマインドマップ

		<p>マップをグループで共有する。その際、自分が気づかなかった視点で連想された言葉があれば、自身のマインドマップに色ペンで書き足す。</p> <p>○振り返り</p>			<p>に書き足させ、自身の語彙を広げさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ワークシート【振り返り編】を用い、自身の学習を振り返らせる。また授業を通し分からなかったこと等も記入するよう促す。
2	2 ・ 3	<p>○和歌や短歌について知る。</p> <p>○鑑賞の仕方を学ぶ。</p> <p>○和歌を鑑賞したことで気づいた、それぞれの季節から連想される言葉を1時間目で作成した四季のマインドマップに記し、さらに自身の語彙を広げる。</p> <p>○短歌を鑑賞する。</p> <p>○短歌を鑑賞したことで気づいたそれぞれの季節から連想される言葉を、1時間目で作成した四季のマインドマップに記し、さらに自身の語彙を広げる。</p> <p>○振り返り</p>	○		<ul style="list-style-type: none"> ワークシート【手引き編】を用いながら、形式の説明、和歌と短歌の呼び名の違いを説明し、鑑賞する前に大まかな特徴を掴ませる。 ワークシート②を用い、全体で和歌（2時間目は春、3時間目は秋）の鑑賞の仕方を理解させ、言葉や表現に着目して鑑賞するよう意識させる。 鑑賞後、個人でそれぞれの季節（2時間目は春、3時間目は秋）から連想される言葉をマインドマップに記すことで、自身の語彙を広げていくよう伝える。 ワークシート②を用い、個人で短歌（2時間目は夏、3時間目は冬）を鑑賞させる。必要に応じて周りとは相談してもよいが、あくまで個人で短歌の言葉や表現に向き合うよう伝える。 鑑賞後、個人でそれぞれの季節（2時間目は夏、3時間目は冬）から連想される言葉をマインドマップに記すことで、自身の語彙を広げていくよう伝える。 ワークシート【振り返り編】を用い、自身の学習を振り返らせる。また授業を通し分からなかったこと等も記入するよう促す。 <p>[知識・技能] ①「記述の確認」「夏」、「冬」の短歌の鑑賞シートの記述（ワークシート②）</p> <p>【評価のポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> 季節感や時間帯を表す言葉や表現、それらから想起される言葉を書き出したり、短歌の言葉を基に作品の情景や込められた気持ちを言葉として表現したりして、自身の語感を磨き、語彙を豊かにしているか確認する。

3	4 ・ 5	<p>○短歌の詠み方を学ぶ。</p> <p>○「四季」をテーマに短歌を詠む準備をする。</p> <p>○短歌を詠む。</p> <p>○鑑賞会に向け、短歌に込めた気持ちや、その気持ちを伝えるためにこだわった言葉、工夫した表現をまとめる。</p> <p>○振り返り</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート【手引き編】を用いながら、現代短歌の歌人たちの短歌を取り上げながら短歌の詠み方を理解させ、自身の気持ちを効果的に伝えるよう促す。 ・ワークシート③を用い、まず短歌にどのような気持ちを込めたいか考えさせる。次にその気持ちをどのような情景に託して表現するか、言葉にこだわり表現に工夫をこらすよう伝える。どちらもマインドマップで広げた自身の語彙が参考になることを伝え、言葉を吟味し、どのような言葉の組み合わせで、どう表現していくか考えるよう促す。 ・ワークシート④、⑤に詠んだ短歌を書かせる。 ・ワークシート③を参考にワークシート④、⑤にまとめさせる。その際、このまとめを鑑賞会後の自身の短歌の振り返りに用いることを伝え、次の学習につなげる意識を持たせる。 ・ワークシート【振り返り編】を用い、自身の学習を振り返らせる。また授業を通し分からなかったこと等も記入するよう促す。 <p>[思考・判断・表現] ①「記述の確認」ワークシート④、⑤の記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・短歌に込めた気持ちが鑑賞者に伝わるよう、言葉にこだわり、表現に工夫をこらしながら短歌を詠んでいるか確認する。
4	6	<p>○クラスメイトの短歌を詠み、鑑賞する。</p> <p>○クラスメイトの鑑賞した内容を読み、自身の短歌を振り返る。</p> <p>○振り返り</p>	○	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート④、⑤を用い、第2次で身に付けた短歌の鑑賞の仕方を思い出しながら、短歌の言葉や表現に着目し、鑑賞するよう促す。 ・4時間目で記した自身がこだわった言葉や工夫した表現を、鑑賞者がどう理解し、鑑賞したか、考えた上で、自身の短歌を振り返るよう伝える。 ・ワークシート【振り返り編】を用い、自身の学習を振り返らせる。 <p>[主体的に学習に取り組む態度] ①「記述の確認」ワークシート④、⑤の記述</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自身の短歌を振り返るため、鑑賞者と通じ合った点を見いだした上で、更に言葉選びや表現の仕方にどのような工夫をしようとしているのか確認する。